14

現代日本文学館

14

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館14
武者小路実篤

昭和四十一年九月一日第一刷

著者　武者小路実篤
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一
振替東京七八七四三

印刷　凸版印刷
製本　凸版製本
定価　四八〇円

Printed in Japan　本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

武者小路実篤伝　亀井勝一郎　3

友情　27

幸福者　95

真理先生　182

愛と死　327

愛慾　385

のんきな男とのんきな造物者　428

マチス、ルオー、ドラン、ピカソ訪問記　451

東洋画と西洋画　466

日本の三大画家 470
牧谿讃美 475
注解 480
解説 489
年譜 496
挿画 武者小路実篤「幸福者」
高畠達四郎「友情」「愛と死」
武井武雄「真理先生」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

武者小路実篤伝

亀井勝一郎

I

今年（昭和四十一年）の三月の末、私は久しぶりで武者小路先生の調布のお宅を訪問した。いぜんにくらべると周囲には家が建てこんで、昔の武蔵野の俤は見られないが、お宅の庭だけには樹木がそびえて、春の光を受けて、こぶしの白い花や桜が咲き乱れていた。尾長鳥が餌を求めて縁側近くに群れているのも珍しかった。静かな山の中にいるような感じであったが、年譜をみるとここに移られてからもう十年になる。

八十歳を越えた先生は、日々、画筆をはなさず、のんびりと芸に遊ぶという境地を楽しんでおられるようである。私が訪問したのは、この伝記を書くためであった。私はいままでも全集や著作にしばしば解説を書き、伝記に触れることもあっただけに、おなじようなことをくり返し書くことに気が引けていたので、この伝記はなるべく一風変ったものにしたいと思っていた。対談の形式をかりて、先生自身の思い出を入れたり、私も質問したりして、変化を求めて、読者の皆さんに喜んでもらいたいと思ったのである。私の最初の計画では、各時期について私が一応の見解をまとめ、その時期に応じて先生との対談を入れようと思った。しかしそうすると対談の迫力がなくなり効果が薄められるように思ったので、対談は対談としてあとにまとめることにした。

先生は明治十八年（一八八五年）に生まれ、今年（一九六六年）満八十一歳を迎えられた。その全生涯をここにくわしく述べることはむろん不可能である。作家としての成長を中心として、その自己形成という面に重点をおいて語ろう。ところで作家という言葉を使ったが、武者小路先生を作家（つまり現代風の「小説家」）として語るだけではなはだ不十分である。詩人であり、戯曲家であり、画家であり、人生の師であり、「新しき村」の実践者であるといったふうで、その仕事は実に多面的である。明治百年を通して非常に珍しいタイプと言っていいわけだが、このようなタイプがどうして形成されたか、という点がこの伝記の中心になると思う。

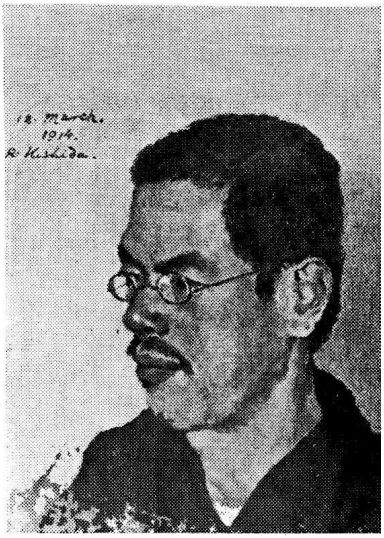
自伝小説「或る男」が完成したのは、大正十二年（三十八歳）である。その中に自分の運命に強い暗示を与えたという父の言葉が出ている。「この子をよく育ててくれる人があったら、世界に一人という人間になるのだが……」という言葉だ。「この言葉は三歳の彼を見て死んでゆく彼の父が云った言葉であったが、彼の一生には大きな力を持っている言葉である。彼が何となく運命を信じ、説くことのできないものの存在を信じるにも、この言葉は力があった。彼に勇気と決心を与えるにも役に立った」と述べている。

壮年期に達して自分の生涯をかえりみたときに、これが自己形成の有力な土台になったことを確認した言葉として受けとっていいだろう。換言すれば、父の予言を成就しな

ければならないという一種の使命感のようなものに導かれてきたとも言える。二歳で父と死別しただけに、この言葉は一種の重味をもって自己形成のうちに作用したであろう。

ところで、「世界に一人」という人間とは、どういう人間だろうか。若い日の先生はその謎の前に立って、あるときは妄想し、また勇気を起こし、たえず動揺したと思われる。臆病、気の小ささ、自信のなさ等々、これは青年共通の心理といっていいが、自分の可能性と、自己不信とが同時に存在して、自分を苦しめたことは、「或る男」の中につぶさに語られている。道はどのようにして開かれて行ったか。

「世界に一人」という人間は、ある異常な才能、あるいは偉人とか天才への夢を促したかもしれないが、武者小路先生の場合には、まず、あらゆる自己限定に対する抵抗となって現われている、そこに最大の特徴があったといっていいと思う。



武者小路実篤像　岸田劉生画（大正3年）

私はいま作家に限定してはならないといったが、あらゆる自己限定に対する抵抗というのは、換言すれば、自分をも、他人をも、無限定の状態において見るということであり、生涯を一貫してくりかえしてきた、それが「自然の意志」という思想である。「自然の意志」とは無限定の生命力であり、その生命力に従って生きていくとき、人間の可能性は無限である。人間への信頼感のこれが基礎となる。

ある一つの職業とか、一つの生活に自己を閉じこめてはならない。一つの立場やイデオロギーにしても同様だ。それらは一種の分別にすぎない。いわば小さな「自我」にとらわれてはならないということだ。こうした修行を自己に課してきたわけで、これが自己形成の中心であった。宗教的性格を帯びているわけで、初期の「幸福者」にすでにはっきりあらわれている。同時に武者小路実篤論のこれが私の基本線である。

II

次に先生の生涯にわたるお仕事を年譜に即して、次の五つの時期にわけてみた。むろんそれぞれ連続しているわけだが、自己形成の道程の特徴をあきらかにするために仮に分類してみたわけである。

第一期は、「白樺」創刊（明治四十三年）から、同誌十年記念号発行の直前、大正八年までの十年間である。この間の代表的作品としては、中編「お目出たき人」「世間知らず」「彼が三十の時」、それからこの集におさめた長編、「幸福者」などがある。短い戯曲にも独自のものを数多く著わしていて、たとえば「わしも知らない」「二十八歳の耶蘇」「その妹」「或日の一休和尚」「日本武尊」「或る青年の夢」など、きわめて興味深いものがある。

これらの作品の中に、すでに武者小路文学の発想方法と、その文章の特徴がはっきり現われているが、当時の文壇はもちろん、日本文学史のなかでも全く異色ある存在であった。当時の文壇の主流をなしていたともいうべき自然主義文学の手法ともまったく相反したものであった。従って自分の作品に対して、非常なひけ目を感じておったことを、

幼少時代（5歳ころ）

やはり「或る男」の中に次のように述べている。

《彼には叙景と云うものがまるで出来なかった。彼は自然の美を感じないことはないが、そして叙景のうまいのを見ると随分感心もするが、痛切には感じられなかった。少なくも明確には感じられなかった。彼には人事のことのように風景や、気候や、天候は感じられなかった。従って彼にはそこが気がひけた》

《それから彼は、平面描写と云うことが出来なかった。そしてそれが出来ないことは当時の文壇においては致命傷のように思われていた。それも彼には一方気がひけた》

《彼に自信のあるのはただ真剣にものがかけるという点だけだった。本当に心を動かさないと筆がとれないという点だった。しかしそれだって自己が小さければ他人にとってそれがなにになるだろう。しかし彼には他の道はすべて許されてないのだ。唯一の道を歩ききるより仕方がない》

これは処女作品集「荒野」を出したころをかえりみての言葉である。特色をもつということは、ある意味では一種の受難である。唯一の道を歩むときのそれは名状しがたい不安である。いまの言葉は、武者小路文学全体に通ずる特徴をみずから語った言葉として興味ふかい。風景とか季節に関するこまかい描写が全作品を通してほとんどない。それから衣食住についても同様である。作中人物がどんな場所で、どんな服装で暮らしているかという外的条件はすべて考慮されないわけで、その無頓着ぶりは、たとえば志賀

直哉氏の文学とは全く正反対である。

ある点からいえば、小説家としてこれほど大きな欠陥はないともいえるであろう。ところが、このために、他に例のない独特の世界が現われたのである。すなわちそれは対話の世界である。

《彼は小説よりは脚本の方に自信があった。彼は小説では地の文章に困った。そしてものを考えたり、あるシーンを空想したりする時はいつも会話で、そしてそこにあらわれてくる人々に彼はなりすますことが出来た》

事実、多くの戯曲があるだけでなく、小説を見ても、それは対話が基本となっている。つまり、精神のドラマにいきなり入り込むということだ。背景とか、衣食住をこまかく書いているひまはない。さまざまな精神をよびおこしてこれととり組み、対話しながら事件を展開していく。武者小路文学とは、全体として巨大な対話編に他ならない。このことは武者小路先生が根本において思想詩人であることを示している。つまり、文学、哲学、宗教、教育といったふうに、まだ分化しない以前の、一種の原始的な混沌状態といってもいいわけで、それを私が先に「無限定」という言葉で表わしたのである。先生は自分では、それこそが「自然の意志」であると述べているわけである。いまあげた第一期の作品の中に端的に現われている。どんなにユニークな存在であったかあきらかであろう。

第二期は「新しき村」の創設（大正七年から大正末年までの八年間）である。これはちょうど大正末年というのが一つの時代的くぎりなので私は第二期としたわけだ。期間は短いけれども、この年代において、武者小路先生のもうひとつの特徴があらわれている。やはり、日本の文学史上の最初の試みと言っていいと思うが、それは「新しき村」の創設である。年齢の上からいえば、ちょうど青年期から壮年期へ移る過渡期であり、この「新しき村」を中心として、今日もなお多くの読者をもつ代表的作品のほとんど全部ができ上がっている。

たとえば長編「耶蘇」「第三の隠者の運命」、それから自伝小説としての「或る男」「友情」、戯曲では「人間万歳」「楠木正成」「桃源にて」「愛慾」などがあり、その他、数多

（上）ドイツ留学中の父実世　（下）若き日の母秋子

くの短編を発表している。

「新しき村」の準備が開始されたのは、大正七年十一月であって、宮崎県の児湯郡木城村字高城に土地を購入して、そこに小規模ながら理想の村をうちたてようとした。こういう実験は、文学者としては空前、あるいは絶後かもしれないが、とにかく武者小路文学を考える場合に、見逃すことのできない事業である。

この日向の村は、昭和十三年、水力発電所ができるために、一部分を残して売却を余儀なくされた。現在はわずかの人数が残っているだけだが、そのかわり、昭和十四年、埼玉県入間郡毛呂山町に四千坪の土地を得て、これを埼玉「新しき村」と名づけて、そして今日なお延々とつづいているということを私は注目しておきたい。

「新しき村」は一種の原始共産体であり、空想的社会主義の日本的な形であるといってもいいであろう。ここでは、すべての権力はむろん、独占的な財産権は否定される。「神の心に従う者は、これ、わが兄弟、わが姉妹、わが母なり」といったキリストの精神がもとになっている。武者小路先生は青年時代、トルストイの影響を強く受けたわけで、「新しき村」を始めるよりも十二、三年前、すでにこのような夢が心の中に芽生えていた。

《彼にとっては文学をやろうと思ったのと、新しき世界を生み出したいと思ったのとは、ほとんど同時である。それは彼の双生児である。新しき村は彼の胎内には十何年いた。人類の胎内には何千年、何万年いたか、彼は知らないが》

そこには大正の第一次大戦後に起こった危機の意識もあったであろう。ロシア革命（一九一七年）が当時の知識階級に複雑で微妙な影響を与えたことは歴史にあきらかである。革命運動だけでなく、さまざまの宗教運動やヒューマニズムに基づく動きも起こっている。「新しき村」の成立した同じ年、内村鑑三は「基督の再臨」運動を提唱している。西田天香の「一燈園」が若い求道者の関心を集めたのもこのころである。当時最もひろく読まれたのは、賀川豊彦の「死線を越えて」や倉田百三の「出家とその弟子」であった。

こういう時代の雰囲気のなかで「新しき村」が成立したことを注目したい。しかしその根本精神は、さきに述べた自然の意志であり、「新しき村」とはその実験道場である。つまり各自の生命が限りなく生かされる世界、同時におのおのの生命が尊重され、調和ある美と愛の秩序が形成されなければならない。これを理想国として、そのモデルを地上に実現しようとしたわけである。経済的にいえば、一種の原始共産体であり、具体的には自作農による自給自足をめざしたものと言ってよかろう。そして、ただ働くだけでなく、働きながら真理を求め美を創造しなければならない国であるというふうに規定されている。

「新しき村」は建設の当時から、一片の空想として嘲笑されてきた。しかし、きわめて大切な一面が見落とされてい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

たと思う。それは現代の芸術家と呼ばれる人々が、ほとんど全部失っている精神共同体の意識である。「新しき村」は理想国のモデルにはちがいないが、そこに初めて生ずる地道で忍耐のいる奉仕の精神を私は重視したい。芸術の仕事とは単なる個人的なものではなく、共同体の内部においての相互奉仕でなければならないという最も正当で健全な道が、ここに夢見られていたということだ。むろん多くの挫折とか内部の紛糾もあったであろうが、そのすべてが武者小路文学の形成、人間観察などに与えた影響はおそらく絶大であったにちがいない。現代文学史家のほとんどはこの点を見おとしている。

回覧雑誌「白樺」の発行を計画した同人　左より実篤
正親町公和、木下利玄、志賀直哉の諸氏（明治41年）

現在の埼玉「新しき村」では実際に働いている人々は三十八名であるという。土地の総面積は約七ヘクタール（七町歩）である。その中で耕地は約三町八反、そのうち、普通の畑が五反、果樹園が四反、茶園が三反、牧草の畑が一町、水田が一町五反、宅地・道路など約三町、残りの六反ほどが雑木林である。（「この道」昭和四十年十二月号渡辺貫二氏「新しき村の現状」による）

その経営面や生活内容については、あとで武者小路先生に直接うかがいたいと思うが、とにかく「新しき村」が創設されてから、ほぼ五十年近いあいだ継続してきたということは、それだけでも十分注目にあたいすることだ。ここにどういう人間が形成されつつあるかということも決して無視出来ないであろう。

第三期は、昭和元年から同十年までである。大正の第一次大戦後についで思想的混迷のはなはだしかった時期であり、左翼運動が全国にひろがり、文学の上でもプロレタリア文学が大きく浮かび上がった時代である。日華事変が始まる前までの期間で、なお自由主義的な雰囲気も残ってはいたが、次の戦争時代に現われた国粋主義が擡頭するとともに、左翼運動への激しい弾圧もくりかえされたいわば思想の内乱時代ともいうべき時期であった。

「新しき村」はこの時期にとくに左翼の側から非難あるいは嘲笑され、その理想と信念はことごとく無視され、また武者小路文学の没落を宣言した者さえ少なくなかった。こうした時期に、どのようにして不遇の日々を堪えぬいたか

ということが、伝記の上でとくに注目しなければならない点だと思う。

「新しき村」は極めて地味なかたちではあるが着々と建設されて行った。大地に生きることを信ずる者の強さを確認しようとする努力とともに、先生はこの時期に、主として日本を中心の偉人の伝記をたくさん書いている。たとえば、孔子、釈迦、空海、法然、一休、黒住宗忠、宮本武蔵、大石良雄、二宮尊徳、北斎、雪舟、井原西鶴などの長、短編の伝記を始め、トルストイを書き、また「耶蘇」も復刊された。日本人にとって親しみぶかいさまざまの偉人を片っ端から書いたということは、これもまた非常に珍しい例と言ってよかろう。私はこの第三期を「伝記の時代」と呼んでいるわけである。

武者小路文学を語る場合やはり無視できない特徴であって、時代が混乱し、思想が紛糾しているときに、我々がとるべき最も大切な心構えは、古典的思想にいったん回帰するということである。東西古今のさまざまな思想の流れの中でも、最も永続的でかつ根本となるものへいったん帰ってみるということだ。これは思想家としての自己形成にとって、基本的条件というべきものではなかろうか。

東西のすぐれた哲学者や文学者は、すべてこれを忘れなかった。たとえばトルストイは原始キリスト教に帰り、ゲーテは古典的ギリシャに帰った。日本に例を挙げるならば、鎌倉仏教の祖師たちはほとんど例外なく釈尊、あるいは経文の古典に帰り、また国学者としては本居宣長は「古事記」へ帰るというふうで、源泉ともいうべき思想に帰ることによって自分を新しくし、同時に時代を新しくしようとした。武者小路先生が不遇ともいわれる時期に、一流の人物について伝記を書いたということは、この意味できわめて注目すべきことであると思う。

第四期は、昭和十一年のヨーロッパ旅行から同二十年、敗戦の日までである。壮年期から老年にはいる時期であって、このヨーロッパの旅を一つの転機として先生は再び旺盛な活動にはいられた。昭和十一年四月二十七日、横浜から白山丸でヨーロッパへ出発し、その年の十二月、アメリカを経て帰朝した。僅かな期間のヨーロッパ及びアメリカ滞在であったが、この期間においてヨーロッパ美術に対して、あらためてさまざまに目を開かせられ、それがその後の先生の絵画上の仕事に大きな影響を与えたことを見のがすことができない。

作品としては、「息子の結婚」「楽園の子等」「愛と死」「幸福な家族」「美しき心の物語」などがこの期間にでき上がっている。同時にヨーロッパ紀行と、数多くの美術論集が次から次へと出版されるとともに（年譜参照）、画家として年々、展覧会を催すようになったのもこの時期から以後である。従って第四期から今日までの武者小路先生とは、作家であると同時に、それ以上にむしろ画家としての活躍を注目しなければならない。私は敗戦（昭和二十年）を、

時期の上でひとつの区切りとしたが、先生のお仕事が、ここで途切れたとか、あるいは質的に変化をとげたという意味ではない。小説や詩はむろん、とくに画業の上では連続して成果をあげていることを注目すべきである。

第五期は、昭和二十一年から現在まで、すでに二十年経過しているが、この時期には、文学作品としては、「真理先生」「馬鹿一」「山谷五兵衛」ものを中心とした長編が断続的に現われている。いま述べたように、絵画のほうに一層力を入れている。文学と新しき村とは「双生児」であると、さきに自伝の一節を引用しておいたが、これに絵画を加えなければならないわけで、武者小路先生の自己形成における主要な要素となるものは、文学と新しき村と絵画であるといっていいであろう。この点も明治以後の文学史上珍しい例である。先生個人だけでなく「白樺」の同人全体が美術好きであったという点も注目しておきたい。

たとえば有島兄弟、志賀直哉、柳宗悦、正親町公和といった人々、及びその周辺にいた岸田劉生、高村光太郎、こういう人々が日本の古美術やヨーロッパの近代絵画や、あるいは民芸など、それぞれに深い関係をもっていたわけで、白樺派はロダンと直接の交渉をもったし、またセザンヌやゴッホを初め、数多くの近代画家を紹介した。武者小路先生はとくに岸田劉生と親しかったし、またヨーロッパに旅して、この集におさめたように、ピカソ、マチス、ルオーなどとも直接に会って、その絵画に対する愛情を深めた。これほど美術と交渉の深かった文学者の集団としては、いままでのところ「白樺」以外にはない。

昭和十一年、ヨーロッパをめぐって帰ってから以後、数多くの美術論を発表したことはさきにもふれたが、「湖畔の画商」「美術を語る」「美術論集」「東西六大画家論」「レンブラント」など、無数の著作があり、私のいう第四期以後においては小説をはるかに上まわるほどである。なぜこれほど美術に心を傾けたかという点について、次のように述べている。

《芸術はその国土に咲いた花である。その花を見ることで、その国民の精神力と気質を知ることができ、それをそのまま愛することができる。国民の最も美しい心の偽らない姿でもある》

日向「新しき村」にて（大正7年）

ヨーロッパ出発直前横浜港にて　左より安子夫人
三女辰子、次女妙子、長女新子、実篤（昭和11年）

これが武者小路先生の美術を通して得た国際的視野というものの根元である。建築や、絵画や、彫刻こそ、言葉の障害を越えて、直接目に訴え、心に働きかける、いわば「世界語」をもっているわけで、美術における「世界語」を通して世界を知ろうとしたわけである。

東西古今を問わず、ここには民族的偏見も、国境もない。すぐれたものでさえあれば驚き、喜び、同時にそれが人間への信頼感となっている。ここで養われた偏見なき精神を私は自己形成の道として重く見たいのである。

《音楽もいい。文学もいい。しかし大天才がみずから描いた本物を、まのあたり見ることができる、それも全体を眼で見ることができる絵という物があることを、僕は喜ぶ者である》

《僕は絵を見ることで人間を知る。人間の精神力を知る。人間を信用する》

《人間が人間を信頼できなくては困る。ところが、いい絵を見ると、心から人間を信用できる。絵ほど嘘がつけないものはないように思う》

《美の謎が本当に解けた時、自然の意志がわかる時であり、人生の目的も、従ってわかる時であると思う》

言葉は簡単だが、美術に対する根本の態度を述べたものとしてここに引用しておきたい。先生の多くの画論を読むとわかるが、いわゆる学問的研究とか、考証といった面はない。自分の目で、じかに接し、そのときの感動にもとづいて、率直に喜びを告げている。いわば絵画に現われた画家の生命力に直接に参入する。具体的には、線や色彩を通して、その生命力の充実性に触れるのである。つまり、絵画は人間信頼の基準となるとともに、人間の本物、贋物、真贋決定の基準ともなっていることに注目しなければならないと思う。

昭和十一年帰朝してから今日までの先生が画業に力を入れたことはすでに述べたが、その絵についての一つの特徴として、野菜や草花を描いた南画風のものを私はいつも愛好してきた。南瓜とか馬鈴薯、きゅうり、とうがらしなど、目立たない野菜の世界をあらためて発見したといってよかろう。それは親しみ深く、同時に一種のユーモアがある。

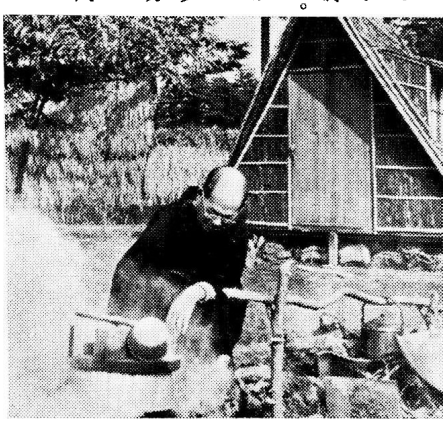
むろんここにも伝統はあるし、また先生は一方で油絵にも力をそそいでこられたから、いまここに述べたことが画業のすべてではないが、先生の画の大衆性といった面を私はとくにあげてみたのである。

この世界は同時に「武者小路実篤詩集」の世界でもあって、詩と絵画がいかに一致しているかということも見のがしてはならない点である。おなじ精神が小説の上では「真理先生」、あるいは「馬鹿一」となって現われているわけで、いわば無名の野菜のもつ性格が、そのままこれらの作品に人間化されて登場している。そしてこれらの背景には、新しき村での長い経験、農事と人間の関係が生かされているにちがいない。

Ⅲ

私は先生のいわゆる「自然の意志」に忠実であることを基本として、その生涯を五つの時期にわけて語ってきた。特徴をできるだけはっきりさせようと心がけてきたが、ここでもうひとつ書いておきたいのは、詩人としての先生である。武者小路実篤というはなはだユニークな存在を、もし一言であらわすことがゆるされるなら、東洋的な思想詩人と呼んでもいいのではなかろうか。詩はむろん、小説にも劇にも絵画にも新しき村の夢のなかにも、それが生きていると私は思っている。詩集だけに限定して考えても、明治以後、日本の詩の歴史の中でもきわめて独自な位置を占めるものである。小説に比べて、こういう点は今まで注目されなかった。

《詩にもいろいろの種類があると思うが、僕の詩はどういう詩か知らないし、人によっては詩とはいえないというかもしれない。自由詩というべきものか。僕は詩のことを特別に研究したものではない。ただ書いてるうちにだんだん調子が高くなり、翅の生えた言葉が生まれるが、その時はおのずと詩が生まれるのだと、自分は思っている。少なくとも僕はそういう時、詩を書くのだ。散文は足で地面の上を歩くようなものだ。這う時も、歩く時も、駆ける時もある。しかしまだ地面から離れることはできない。飛行機が滑走していて、地面から離れないような時、まだ詩は生まれない。しかし地面から離れた時、詩になる。少なくとも自分ではそう思っている。人間の挙動も詩になると舞踊と



埼玉「新しき村」第1回収穫祭のとき（昭和15年）

なると思う。言葉に翅が生えると詩になると思う》（詩集「歓喜」あとがき）

詩をどのようなものとして考えておられるか、その一端がこの引用からうかがわれるであろう。詩とは翅が生えた言葉にちがいないが、それは心の高まりを示すとともに、心の熟しきったときでなければなるまい。ヴァレリーの「一家言」の中に「羽毛のように軽いのでなく、鳥のように軽くなければならぬ」という言葉があって、私は印象ぶかく心にとどめてきたが、生命のこもっていないとき、言葉は羽毛のように軽くなり、ただ言葉の遊戯に過ぎなくなる。しかし鳥のように軽快に飛ぶためには、生命がこもり、思想が熟していなければならない。

先生の詩集を読むと、難解な言葉は一つもなく、あたかも子供の無邪気な自由画を見るようだが、その由来するところは、先に述べた自然の意志といっていいだろう。即興的なものも多いが、言葉の使い方は繊細であり、しかものびやかな点は無類である。私は武者小路文学をかつて「偉大な小児の祈禱」と呼んだことがある。この祈禱に翅が生えて飛んでいるのが詩だといってもいいと思う。

また詩のなかには箴言（アフォリズム）の傾向があることも興味深い。一刀彫りの彫刻を見るような感じがある。どの詩もそうだが、いわゆる詩らしい気どった言葉は一つも使っていない。誰でも日常使っている、気にもとめない、なまの言葉を組み合わせて、それをみごとな詩語たらしめ、自由自在な味わいを出している。これが詩人のいちばんたいせつな点である。俗語や死んだ言葉すらも復活させるところに、詩人の真の技術があるからである。この日常用語の自由な使い方に注目しなければならない。誰でもできそうにみえるのだが、これがいちばんむずかしい。先に述べたように根本に熟した思想がなければならないからである。そこに生じた自由――無限定の生命の自然流露と言ってよい。初期のころから満八十一歳になられた今日まで、あらゆるときに書かれた詩にこの特徴が一貫している。

＊

次に最初にしるしたように、武者小路先生との対談をのせることにした。私がいままで簡単にまとめたことを念頭において、それぞれの時期についての思い出を気軽に話していただきたいと思ってお宅を訪問したのである。この「伝記」のための肉づけとなれば幸いである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com